

# 魚類防疫に関する技術指導と研究

(魚病対策指導事業・水産用医薬品対策事業)

開内 洋・岡本 満・山根恭道

石原成嗣・松本洋典

## 1. 研究目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び、養魚指導・相談を行なう。

## 2. 研究方法

種苗生産場、中間育成場、養殖場を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導、助言を行うとともに、疾病発生時には迅速に現地調査や魚病検査を行った。また、天然水域で大量へい死が起こった場合も現地調査や魚病検査を行った。

魚病の検査方法は主に外観及び解剖による肉眼観察、検鏡観察と細菌分離を行なった。細菌が分離された場合は、薬剤感受性検査(ディスク法)を実施し、治療・対策方法並びに水産用医薬品の適正使用について指導を行なった。アワビ類のキセノハリオチス感染症(OIE 指定疾病)が平成23年3月に本邦で初めて発生したため、本県でも農林水産省のガイドラインに従いモニタリング調査を行った。また、平成23年6月に厚生労働省がヒラメのクドア属粘液胞子虫(*Kudoa septempunctata*)による下痢・嘔吐等を症状とする有症事例を食中毒として取り扱うこととしたため、本県でも、水産庁の作成した防止対策に従い、養殖場等でモニタリング調査を行った。

なお、アユの冷水病に関しては「アユ冷水病対策事業」に別途記述した。

## 3. 研究結果

今年度の魚病診断件数は、隠岐地区海面2件、

出雲地区海面5件、石見地区6件、内水面18件(うちKHV検査8件)であった。主要なものとしては以下のとおりである。

出雲地区では、中間育成中のヒラメ稚魚でシュードモナス・アンギリセプチカ症が発生した。種苗生産中のアカアマダイに脊椎前彎症や滑走細菌症等が見られた。

石見地区では養殖のヒラメにビブリオ症や白点病などが発生した。天然アカガレイにX-cell病の個体が見られるようになった。また、食品への異物混入に対する相談もあった。

隠岐地区では8月に種苗生産用ヒラメの親魚でネオヘテロボツリウム症が発生した。

アワビ類のキセノハリオチス症に関して、県内種苗生産施設及び畜養場等のメガイアワビおよびクロアワビについて、755個体(155検体)のPCR検査を行ったが、全ての検体で原因菌は検出されなかった。

ヒラメのクドア症に関して、県内種苗生産施設及び養殖場のヒラメについて88尾(34検体)のPCR検査と30尾の検鏡検査を行ったが、全ての検体で原因菌は検出されなかった。

内水面では、コイの斃死発生件数が2件あり、そのうち個人池1件でKHV陽性が確認された。エドワジェライクタルリ症は、西部の天然河川のアユ(漁獲物)について1件の陽性を確認した。また、KHV以外では、アユ、コイ、ヤマメ、フナなどで細菌性疾病等が見られた。

海面(出雲地区、石見地区、隠岐地区)及び内水面の疾病発生状況及び診断状況の詳細については添付資料に記述した。